恥感情の体験頻度とその構造

生駒　忍
（川村学園女子大学）
キーワード: 恥　大学生　因子構造

The frequency of shame experiences and its structure
Shinobu IKOMA
(Kawamura Gakuen Woman's University)
Key words: shame, undergraduate students, factorial structure

目　的

自己意識的感情の一つに，恥がある。その心理学的な研究では，類似した場面で生起する罪悪感との区別がしばしば議論的となってきた。一方，恥感情も一枚岩ではなく，性質の異なるいくつかに分けられることが指摘されている。特に，他者への攻撃や憎悪につながる屈辱感と，行動を社会規範に沿わせる適応的な感情としての羞恥感とに二分されるとする考え方はしばしば見られる。薊(2010)は大学生を対象として質問紙調査を行い，自身の行いのため注意や叱責を受けた場面で生起する感情を検討し，「罪悪感」「羞恥感」「屈辱感」の 3 因子を抽出し，恥の二分法を支持する知見を得ている。また，落合・阪(2002)による恥に対する過敏性の検討で得られた「恥辱」「羞恥」の 2 因子にも，先の区分への対応性が認められる。

恥感情を屈辱感と羞恥感とに分ける二分法は，このように実証データを伴っている。それでもなお，不十分な印象もある。例えば薊(2010)では，注意や叱責を受けた特定の一場面を想起させてそれに対しての回答を求めているが，それゆえ得られた知見は場面の限定されたものとなっている。そこで本研究では，そのように特定の場面に絞るのではなく，日常の中での体験頻度に基づいての知見を得て，恥感情の二分法についての一般性を検討する。

方　法

調査対象者　大学生 122 名（男性 28 名・女性 94 名; 平均年齢 19.09 歳）が調査に協力した。

質問紙　薊(2010)において恥や罪悪感を表す表現から因子分析により「屈辱感」因子とされた 7 項目および「羞恥感」因子とされた 3 項目の計 10 項目を提示し, それぞれの感情をふだんどのくらい経験しているかについての評定を求めた。「自尊心が傷つく」のように現在形のもの,「プライドが傷ついた」のように過去形のもの,「ぶざま」のように体言止めのものが混在しているが，薊(2010)が用いた表記をそのまま採用した。評定方法は 1（まったくない）～5（よくある）の 5 件法とした。

手続き　集団で質問紙を配布し回答を求めた。

結　果

欠損値のあった 1 名を除き，121 名分のデータを分析対象とした。各項目の平均値は，2.19（面目が潰れた）～3.79（恥ずかしい）の範囲となった。

因子数を 2 として因子分析を行ったところ, 適合度は $\chi^2(26) = 66.06$ ($p < .00005$)となり，このモデルは棄却された。得られた因子構造は，薊(2010)で「羞恥感」因子とされた 3 項目と「ぶざま」「自分の立場がないと感じる」が第 1 因子に高い負荷を示しており，この点でも薊(2010)の 2 因子構造とは異なるものとなった。

因子数を 4 とした場合，適合度は $\chi^2(11) = 17.59$ ($p > .05$)となった。最尤法プロマックス回転による結果は Table 1 のようになり，ほぼ単純構造が得られたといえる。第 1 因子は薊(2010)で「羞恥感」を構成していた 3 項目全てと「屈辱感」からの 2 項目からなり，以降の 3 因子には「屈辱感」因子に含まれた項目が分散した。因子間相関を求めたところ，第 4 因子と他の因子との間で負となり，それ以外の間では全て正であった。

Table 1　恥感情の体験頻度に対する 4 因子解

	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4	共通性
恥ずかしい	**.776**	-.330	.168	.071	.553
恥辱	**.769**	.211	-.055	-.164	.631
恥をかく	**.725**	-.033	.113	-.008	.559
恥じ入る	**.701**	.306	-.197	.044	.751
ぶざま	**.496**	.231	-.070	.150	.522
面目が潰れた	.073	**.755**	.186	-.049	.747
屈辱的	-.023	**.649**	.195	.084	.624
プライドが傷ついた	.036	.111	**.717**	-.124	.562
自尊心が傷つく	-.072	.150	**.688**	.119	.614
自分の立場がないと感じる	.008	.024	-.002	**.980**	.995
寄与率	.247	.133	.115	.106	

考　察

本研究では，大学生における恥感情の体験頻度について，その構造を検討した。因子分析の結果，薊(2010)が得たような 2 因子構造は再現されなかった。特定の一場面での感情強度を評価させた場合と，特に場面を定めず日常的な体験を評価した場合とでは，認められる感情構造が異なると考えられる。これは，恥感情に対する屈辱感－羞恥感の二分法について，その一般性がどの程度であるかに注意を払うべきであることを示唆している。

本研究で得られた 4 因子構造も,「屈辱感」因子とされた 7 項目が 4 因子全てに分散したことから，二分法に沿っていないことは明らかである。とはいえ，項目数が少ないことや因子間相関の高さからは，統計的には必ずしも安定したものではない可能性も否定できず，角度を変えてのさらなる検証が求められる。

引用文献

薊理津子 (2010). パーソナリティ研究, *18*, 85-95.
落合佐敏・阪武彦 (2002). 鳴門生徒指導研究, *12*, 46-59.